

『明状元図考』訳注(稿) 一

Ming zhuang-yuan tu-kao (1)

鶴成久章

TSURUNARI Hisaaki

(国際共生教育講座)

(平成十九年十月一日受理)

解題

巻首の記載によれば、本書は、顧鼎臣とその孫祖訓の彙編、呉承恩と程一楨の校益、黄文徳と呉脩道の同閲、絵図は黄応澄、書考は黄応續とされる。編者の顧鼎臣は、字は九和、号は未斎、崑山の人で、弘治十八年の状元である。嘉靖十九年に卒している。また、その孫の祖訓については、詳細な伝記・事績は未詳である。

さて、本書の構成は、まず沈一貫撰「明状元図考序」(万曆三十五年)、湯賓尹撰「明状元図考叙」(同)、呉承恩撰「状元図考凡例」、「国朝廷試事儀」、「明状元図考採用書目」、「明状元図総目」が首巻に置かれ、そして、巻一以降が本編にあたり、巻一には洪武四年から宣徳八年までの状元の伝記と挿絵が収められ、以下、巻二には正統元年から正徳十六年まで、巻三には嘉靖二年から万曆三十八年までの状元が収められている。

巻四は「明三及第会元詩文」、巻五は「明会元及第通考」、「歴科状元総考」、「京省及第会元分考 附及第会元命造評註」、そして、巻末に呉無相撰「状元図考跋」(万曆三十五年)となっている。

本稿が底本としたのは、公文書館(内閣文庫)所蔵の万曆三十五年序刊本である。これは、『千頃堂書目』巻九に載せる「顧祖訓明状元図考五巻」にあたるものと思われる。同じ版本が、日本の蓬左文庫にも蔵されている。また、『中国古籍善本書目 史部』(上海古籍出版社 一九九一)によれば、北京図書館、故宮、北京市文物局、天津図書館、南開大学にも蔵されているようである。このうち故宮所蔵本が、『故宮珍本叢刊』(海南出版社 二〇〇二)第六十冊の中に影印されているほか、底本の所蔵機関は未詳であるが、北京の中国書店からも一九九一年に線装の影印本が出版されている。

この『明状元図考』は、万曆三十五年序刊本以来、清朝康熙年間に至

るまで増補が繰り返されて、複数の版本が出ている。該書が徽州歙邑仇村^{註1}黄氏の絵を刻した美しい挿図本であるためか、中国大陸、日本、台湾、米国などに伝存する書は少なくない。なお、増補六卷本は、『明代伝記叢刊』（明文書局 一九九二）第二十冊に影印本が収録されている。その他、版本の問題については、最終的に知見をまとめる予定である。

本稿では、まず巻一の訳注作業を行った。今後、巻二以降に対しても継続的に訳注を作成し、最終的には首巻の諸篇についても訳注を作成する予定である。

注1 大木康氏「明末江南における出版文化の研究」（『広島大学文学部紀要』第五十号特輯号一 一九九一 いま『明末江南の出版文化』研文出版 二〇〇四 所収）第二章参照。なお、李国慶編纂『明代刊工姓名索引』（上海古籍出版社 一九九八）「附録」に黄氏の世系表が見られる。

- 【訳注凡例】一、原文の引用は、旧字を用いることを原則とするが、必ずしも正字体に統一できていないわけではない。
- 二、底本中の小字は、文字を小さくして表示している。また、擡頭部分については、その字数分の空格によって示している。
- 三、訓読文は、紙数の関係で割愛した。但し、解釈に不安のある部分及び詩詞については、注の中でつとめてその訓読文を提示することとする。
- 四、紙数の問題により、注は簡明を旨とするが、明代の科擧制度に関わる語彙については極力言及する。

明狀元圖考卷之一

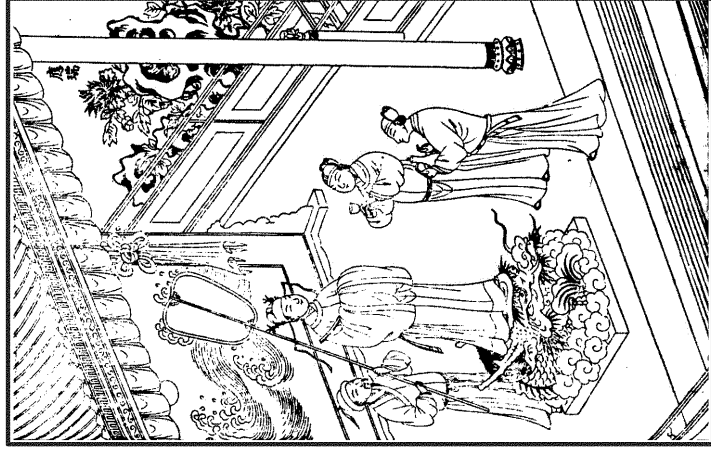
狀元吳伯宗

洪武四年辛亥 廷對之士俞友仁等一百二十人、擢吳伯宗第一。 賜伯宗

等進士及第、出身有差。

按、吳伯宗字、名祐、江西金谿人。父儀元鄉貢進士^{註1}、伯宗生而岐嶷、十歲通學業。識者、奇之嘆曰、玉光劍終不可掩^{註2}。洪武庚戌鄉試及殿試俱第一。是時初開科、高皇帝親製策問^{註3}、伯宗條對稱旨、賜袍笏冠服授承直郎禮部員外郎。第二第三授承事郎。一三甲同^{註4} 登科^{註5}者洪武六年罷科擧、專用辟薦。其目有經明行脩、有懷才抱德、有賢良方正、有人材、有孝廉、群擧於朝。而各省貢士、皆令卒業太學^{註6}、以次除用。恭罷進士之科者、十有二年而復擧之^{註7}。

是科、高麗國人試者三人、惟金濤登第、授東昌府安丘縣丞、尋以不通華言、請還本國。詔給道里費、遣之。登科錄止刻策一篇^{註8}。



洪武四年（二三七二）、殿試にのぞんだ士は、「全元の」俞友仁（字は文輔、仁和の人）はじめ百二十人であり、吳伯宗を第一位に選び出した。伯宗等には「資格に」差をもうけて進士及第、進士出身を賜わった。

考えるに、吳の伯宗とは字であり、名は祐である。江西金谿の人であ

る。父の儀は元朝の郷貢進士であった。伯宗は生れつき才知が人並み優れており、十歳で挙業に通曉した。「その能力を」見抜いた者が、そのすばらしさに感嘆して言った、「玉光の劍は、どうにも覆い隠しようがないものだ。」と。洪武三年の郷試と「翌年の」殿試とともに第一位であった。この時「明朝になって」初めて科挙を開始し、高皇帝(洪武帝)はみずから策問をおつくりになった。伯宗の対策は天子の御心にかない、袍、笏、冠、服を賜わり、承直郎礼部員外郎を授かった。第二位と第三位は承事郎を授かった。第二甲、第三甲も同じであった。

『登科考』洪武六年に科挙を中止して、もっぱら推薦の制度を用いた。その細目には、経明行修、懷才抱徳、賢良方正、人材、孝廉が有って、「有為の人材を」朝廷に一斉に推挙した。そうして各省から推薦された士人は、みな所定の学業を国子学で修得させ、「その」席次によって任用した。結局、進士科を十二年間中断してから、再びこれを採用することとなった。

この科には、高麗国から試験に参加した者が三人いたが、金濤(字は仲恬)だけが登第し、東昌府安丘県丞を授かった。やがて、中華の言葉に通じていないことを理由に、本国に帰ることを願い出ると、道中の旅費を支給して、彼を帰らせるという詔が下った。「登科録」にはただ策一篇のみを載せている。

【注】①文儀元郷貢進士……具儀については、『千頃堂書目』巻一「春秋類」に、『春秋釋伝』を載せ、その注に、「字は明善、金溪の人、虞集に従字す。至正丙申郷試に挙げらる。吳伯宗の父なり。」とある。②玉光劍終不可掩……焦竑撰『玉堂叢話』巻七「企羨」には、「幼而顯悟、郷先達葛元喆曰、此兒玉光劍氣、終不可掩。」とある。③是時初開科高皇帝親製策問……『明史』巻七十一「選

舉二」に、「帝親製策問、試於奉天殿、擢吳伯宗第一。」とある。④授承直郎禮部員外郎……『洪武四年進士登科録』(天一閣明代科挙選刊)には、「第三甲」については、「授將仕郎」とある。承直郎は正六品、承事郎は正七品、將仕郎は正九品。⑤登科考……明・俞憲撰『皇明進士登科考十二卷』のこと。同書巻一の文章では、「皆令卒業太學」の「皆」が「但」になっており、また末尾の「復學之」の句が無い。⑥太學……都(南京)に設置された最高学府。当初、国子学と称され後に国子監という名称になった。また、永樂年間の遷都以降、北京にも設置され、南京の方を南監、北京の方を北監と呼んだ。

⑦洪武六年罷科舉專用辟薦、復學之……『明史』巻七十一「選舉三」に、「六年復下詔曰、賢才、國之寶也。古聖王勞於求賢。……山林之士德行文藝可稱者、有司采擧、備禮遣送至京、朕將任用之、以圖至治。是年、遂罷科舉、別令有司察擧賢才、以德行為本、而又藝次之。其目、曰聰明正直、曰賢良方正、曰孝弟力田、曰儒士、曰孝廉、曰秀才、曰人才、曰耆民。皆禮送京師、不次擧用。而各省貢生亦由太學以進。於是罷科舉者十年、至十七年始復行科舉、而薦擧之法並行不廢。」とある。⑧登科録止刻策一篇……『洪武四年進士登科録』は、巻末に「制策」が掲載されるのみで、「対策」は無い。

【補説】図には、画工「黃應瑞」の署名がある。画題は、袍、笏、冠、服を賜わる場面か。

状元丁顯

洪武十八年乙丑、會試中式十四百七十二人、黃子澄^{註①}第一、練子寧^{註②}次之、皆監生也。第三名花^{註③}繪乃浙江新解官。及殿試、讀卷官奏繪^{註④}第一、子寧次之、子澄又次之。是年童謠云、黃練花、花練黃^{註⑤}。時人莫解。比會試、及讀卷、所擬名數、正協童謠。先一夕、上夢殿前一巨釘綴白絲數縷悠揚日

下。及折首卷、乃花綸。上以其年少抑之。已而得丁顯卷。姓名與夢符。且顯字、日下雙絲也。遂擢狀元。花之被選、一時無不知者。故同榜皆呼爲花狀元。練子寧集有送花狀元歸娶詩^{註⑤}。按丁顯、字彥偉、福建建陽縣人。時年二十八、授脩撰。後獲譴歸、德業文章無聞焉。殿閣詞林記^{註⑥}洪武初、翰林院官、皆由薦舉進。雖設進士科、未有人翰林者。是科、以第一甲賜進士及第丁顯、練子寧、黃子澄爲脩撰、第二甲賜進士出身馬京等爲編脩、吳文等爲檢討。皆出簡用、不由選法。命下吏部、惟發註而已。至戊辰、以第一任亨泰爲脩撰、第二唐振、第三盧原質、爲編脩、著爲令。【校勘】「折」は、「拆」の誤り。



洪武十八年（一三八五）、会試に合格した士人は四百七十二人であり、黄子澄（名は湜、字が通行した、分宜の人）が第一位で、練子寧（名は安、字が通行した、新淦の人）がその次であった。ともに監生であった。第三位の花綸（字は王言、仁和の人）は、浙江郷試の新解元であった。殿試の時に、読卷官は、「綸が第一位、子寧がその次で、子澄がさらに

その次です」と奏上した。この年、「巻の」童謡に、「黄練花、花練黄」と歌われていたが、当時理解出来る人はいなかった。会試および「殿試の」読卷の段に至って、決定しようとした名前と順位がちょうど童謡と一致した。「これより」先のある夕べ、皇帝は宮殿の前に一本の巨大な釘があり「それに」幾筋かの白絹が掛かって太陽の下でたなびくのを夢にみた。首席の答案「の封」をひらいたところ、なんと花綸であった。皇帝は彼が幼いのを理由にその順位を下げた。しばらくして丁顯の答案を得た。「彼の」姓名は夢「の巨大な釘」と符合した。おまけに「顯」という字は、日の下に二つの「糸」がある。かくて「丁顯を」状元に選んだ。花が「当初、状元に」選ばれたことは、その当時知らない者はいなかった。だから、同榜「の合格者」は誰もが花状元と呼んだ。練子寧の詩文集に、「花状元の帰り娶るを送るの詩」が収録されている。

考えるに、丁顯は、字は彦偉、福建建陽県の人である。この時二十八歳で、修撰を授かった。後に罪を得て帰郷し、道徳や事績、文章等で名声を揚げることは無かった。

『殿閣詞林記』洪武の初め、翰林院の官には、すべて推挙をへて進むことになっていた。進士科を設けたものの、まだ翰林院に入った者はいなかった。この科では、第一甲で進士及第を賜った丁顯、練子寧、黄子澄を修撰とし、第二甲で進士出身を賜った馬京等を編修とし、吳文等を檢討とした。すべて選択任用のやり方で行われ、選抜の法規によるものではなかった。礼部に下された命令は、ただ選抜の登録だけであった。洪武二十一年になって、第一位の任亨泰を修撰とし、第二位の唐振、第三位の盧原質を編修とし、「以後は」法令として著した。

【注】①監生……国子学（監）の学生。 ②読卷官……共同で殿試の答案

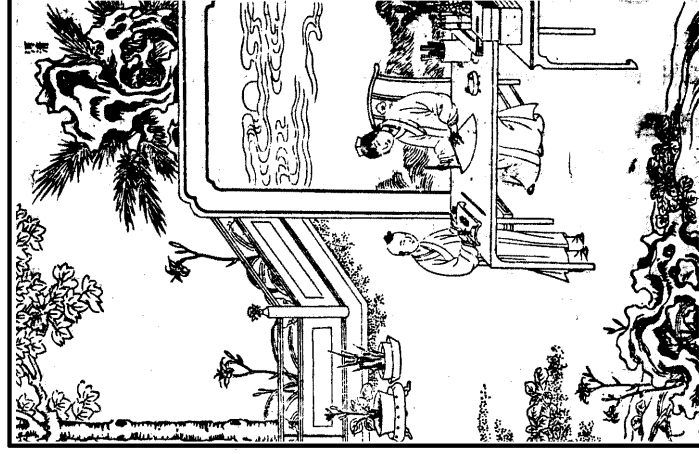
状元任亨泰

洪武二十一年戊辰 廷對^①之士施顯等九十九人、擢任亨泰第一。罷對策、不稱旨者二人^②。

按任亨泰湖廣襄陽人、有司推薦赴應天、由監生中式。廷試條對詳切、即以天下爲己任。上親擢爲第一、寵遇特隆、授脩撰。每召建議、即賜手詔、書襄陽任而不名。襄陽志^③亨泰狀元及第 太祖曰、新狀元得人、勅有司立牌坊、以榮之。故坊上特揭 聖旨字。他坊惟恩榮小扁、此我朝天下牌坊之始。十三歲時、嘗題扇面云、杲日初升萬木低、書船撐出小樓西、先生正熟朝天夢、門外山禽莫亂啼^④。其貴達也、人以是詩、預占之。狀元記事^⑤赴考前夕、問響卜、木杓指北、行聞有病肉熱者、覆醫人曰、昨服第一鍾^⑥。亨泰即回曰、吾已得讖矣。

(対策)を審査して名前と順位を擬定し、臨軒に伺候した。通常、翰林官あるいは朝臣のうち文学に優れた者が任じられた。③黄練花、花練黄……解釈未詳。『中丞集』『中丞遺事附録』には「出野史」として「當時有丁練黄花練丁之謡」とあるので、特に意味はないのかも知れない。④同榜……「榜」とは合格者発表の掲示。同榜はすなわち同年合格のこと。⑤練子寧集ノ歸聚詩……『中丞集』巻下に、「送花状元詔許歸聚」がある。⑥殿閣詞林記……明・廖道南撰『殿閣詞林記』巻二十一「銓注」。「命下吏部」が「命下禮部」になっているほか若干の異同がある。

【補説】文章と画題との関連は未詳。花綸を描いたもののようにも見える。



洪武二十一年(二三八八)、殿試に臨んだ士人は施顯(字は孟微、常熟の人)等九十九人であり、任亨泰を第一位に選んだ。対策は書き終えたものの、聖旨にかなわなかった者が二人いた。

考えるに、任亨泰は、湖広襄陽の人であるが、役人の推薦により応天府に赴き、監生「の身分」で合格した。殿試での対策は詳細かつ適切であり、天下「のために働くこと」を自分の任務とする「という内容」であった。皇帝自らが第一位を選び、格別に手厚い待遇を与え、修撰を授けた。召されて建議を行うたびに、「皇帝が」自ら書いた詔書を賜わり、「それには」襄陽の任と書き、名は記さなかった。

『襄陽志』亨泰は、状元で及第した。太祖は、「新しい状元に人を得た」と言い、役人に勅命を下し、牌坊を立てて、このこと(亨泰の栄誉)を顕彰させた。それで、牌坊の上には特別に「聖旨」の字が掲げられている。他の牌坊はただ「恩榮」の小さな扁額があるだけである。これは我朝における天下の牌坊の濫觴である。「亨泰は」かつて十三歳の時に、扇面に詩を書いて言った、「明るい日が今し方登り万木が「頭を」たれ

ている下で、美しく飾りたてた遊覧船を小樓の西にこぎ出そう、先生が天子に拝謁するという夢が正に実現しようとしているのだ、門の外の高山よ乱れ啼くのをやめよ」と。彼が貴顕に栄達するのを、人々はこの詩によって、預め占っていた。

『状元記事』試験に赴く前日の夕べに、響卜を問おうとしたところ、木杓が北を指した。「そこで、北に」行ってみると、体内で熱を出す病にかかった者がおり、医者に、「昨日、第一回目の処方薬を服用しました。」と告げるのが聞こえた。亨泰はすぐに戻って言った、「私はすでに「状元及第の」予言を得たぞ。」と。

【注】①廷對……殿試で皇帝からの出題（制策）に対して答えること。②不稱旨者二人……『明太祖實錄』卷百八十九「三月乙卯朔」には「時廷對者九十七人」と言うのは、この二名を除いたものか。③襄陽志……明・吳道邇纂修『万曆襄陽府志』（四庫全書存目叢書『史部第二二一・第二二二冊』卷十六「城池」の「状元坊」は、「司立牌坊」のあとに「于其門」の語があり、「坊上特掲」を「此坊獨掲」に作るほか若干の異同がある。④泉日初升萬木低……（訓読）「泉日初めて升起萬木低る、晝船を擡ぎ出す小樓の西、先生正に熟す朝天の夢、門外の山禽亂れ啼く莫れ」⑤状元記事……『千頃堂書目』卷九「典故類」に、張幹『状元紀事三卷』がある。宋太祖の建隆庚申科から、明世宗の嘉靖己丑科までの記載があるという。未見。⑥問響卜……ある場所に出かけて行って他人の会話を聞き、その内容によって吉凶を占うこと。

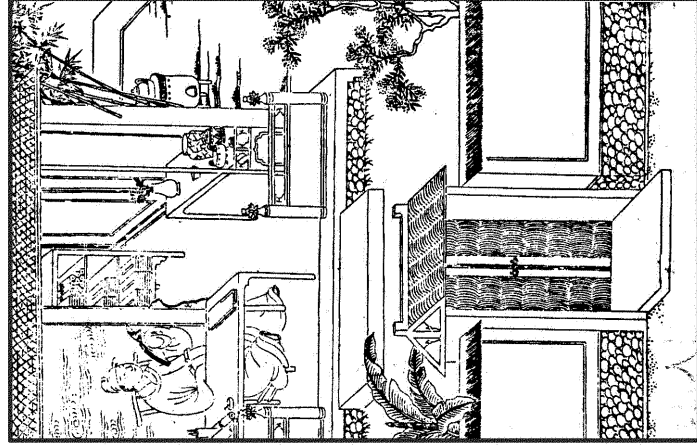
⑦服第一鍾菴……未詳。待考。

【補説】図には、画工「黃河清」の署名がある。画題は、十三歳の時に扇面に詩を書いている場面であろう。

状元許觀

洪武二十四年辛未 廷對之士許觀等三十一人、擢許觀第一。

按許觀、字瀾伯、直隸貴池人。本姓黃、從母姓許。嘗築翠薇書舍、勤讀書。鄉會試俱第一。時年二十八。廷對禦戎策、以天道福善禍淫之機、人事練兵講武之法爲言。高廟嘉之、擢状元及第。官至禮部侍郎。後建文中、死於靖難^{註①}。妻翁氏及二女、亦赴水死節。按此、則許觀已三元^{註②}矣。當時不傳、想削籍而人不知故耳。



洪武二十四年（二三九二）、殿試に臨んだ士人は許觀等三十一人であり、許觀を第一位に選んだ。

考えるに、許觀は、字は瀾伯、直隸貴池の人である。本姓は黄であったが、母の姓である許に従った。かつて翠薇書舎を建て、読書に励んだ。郷試、会試ともに第一位であった。この時二十八歳であった。殿試における「西方の蛮人を防ぐ」「という出題に対する」策では、天道の方面では、善行に幸いし無道に禍いすることの機微、人事の方面では、兵馬

を訓練し武事を講求する手段について意見を述べた。高祖（洪武帝）は、これをほめ、状元で及第させた。官職は礼部侍郎に至った。後に、建文帝の治世に、靖難の役で死んだ。妻翁氏と二人の娘も、また入水して節義に殉じた。これ（許観の成績）を考えてみれば、許観はすでに三元である。当時「この栄誉が」伝わらなかったのは、思うに籍を削られたため人々が知らなかったからである。

【注】①靖難……洪武帝の第四子燕王朱棣（後の永楽帝）が、甥である第二代皇帝建文帝の位を篡奪した事件のこと。②三元……郷試、会試、殿試すべてで第一名となること。『明史』卷七十「選舉二」には、「商輅、輅淳安人。宣宗末年乙卯浙榜第一人、三試皆第一、士子輒稱爲三元、明代惟輅一人而已。」と言う。

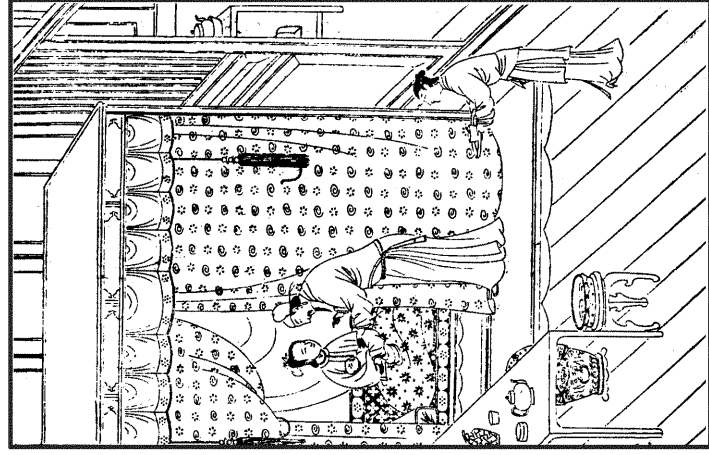
【補説】画題は、翠薇書舎を建てて、読書に励む様子。

状元張信

洪武二十七年甲戌 廷試彭德等一百人、擢張信第一。

按張信、字誠甫、浙江定海人。鄞人單仲友、徵至京師、備顧問。因言本府名明州與 國號同、請易之。上徐思之曰、汝言是也。復詢仲友山川讖緯之詳。仲友對曰、昌國縣舟山之下、有状元橋^註。蓋因讖故名。而童謠謂、状元出定海。以臣觀之、二邑素無類異。將有待耶。上聞定海之名喜曰、海定則波寧。宜改名寧波。時洪武十四年也。迨二十年、省昌國併入定海。二十七年、縣人張信果應其讖。蓋信卽昌國在城人也。又郡中初架石梁、有謠曰、人從橋上行、状元此時生。其父首從橋行逮還家、有生兒之喜。及擧鄉薦赴京、夢以竹片反押青犬頭置兀上。解者曰、竹片反押青

犬、乃狀字。置兀上、湊兀字。況當甲戌、必魁天下。果如言。



洪武二十七年（一三九四）、彭德（鳳翔の人）等百人^註に殿試を行い、張信を第一位に選んだ。

考えるに、張信は、字は誠甫、浙江定海の人である。鄞人の単仲友（名は佑、字が通行した）は、「皇帝に」召されて都に上り、下問に備えた。「下問に臨んだ」その機会に、自分の「出身の」府の名称である明州は国号と同じであることを述べ、これを変えて下さるよう請うた。皇帝は、ゆつくりとこのことを思索して言った、「おぬしの言うことはもつともである。」と。さらに仲友に山川の讖緯の祥瑞について尋ねた。仲友は答えて言った、「昌国県の舟山の下に、状元橋がございます。恐らく、讖にちなんで名づけたものと思われれます。しかも童謡に「こう」言っています、『状元が出て海を静める』と。私のみるところによりますと、二つの邑には以前より抜きん出た才能「の者」は出ておりません。あるいは「その出現を」待っているということではないでしょうか。」と。皇帝は、定海という名を聞いて喜んで言った、「海が静まれば、波は安

らかとなるであろう。名を寧波に改めるがよい。」と。時に洪武十四年（一三八一）のことであった。結局、二十年になって、昌国県を廃止して定海県に併合した。二十七年、県人の張信が果してその讖に応ずることとなった。信は昌国県城内に住む人であった。さらに、郡中に石橋を架けたばかりのころ、こういう謡が現れた、「人が橋の上を渡って行けば、状元がその時生まれる」と。彼（張信）の父が初めて橋を渡って家に帰り着いたところ、子供が生まれるという慶事があった。「張信が」郷試に合格し都に赴く段になって、竹切れが反りかえって黒犬の頭を押さえつけて兀子（小さな腰かけ）の上に置くのを夢にみた。謎解きをする者が言った、「竹片がそって黒犬を押さえつけているのは、『狀』の字にはかならない。兀の上に『頭を』置けば、『元』の字になる。ましてや『時あたかも』甲戌（郷試が挙行される年）に当たっている。必ずや天下の首魁となるであろう。」と。果して、言葉通りであった。

【注】① 状元橋……『嘉靖定海県志』巻五「山川」の「状元橋」に「宋紹熙三年、令王阮創立。於石欄刻云、人從石上行、狀元此時生、遂以狀元橋名。國朝張信以狀元及第、始符其言。」とある。

【補説】画題は、父が橋を渡って家に帰り着いたところ、張信が生まれた場面。

状元陳郊 三月榜

状元韓克忠 六月榜

洪武三十年二月、會試天下貢士。學士劉三吾等爲考官、取秦和宋琮等五十二人、中原西北士子無預者。三月 殿試以閩縣陳郊爲第一、北方學人咸以爲言。上閱、所取皆南士、疑之。命儒臣再考、下第卷中擇其優者、

取之。於是、侍讀張信等受命人、各閱十卷、果以不堪文字奏進、上益怒。於是、取六十一人。 殿試再試策問、以山東韓克忠爲首。時六月辛巳朔。皆山東山西河南北平陝西四川士也。 登科考^{註②}陳郊閩人。精數學。就試之日、謂所親曰、今歲狀元當刑奈何。已而身擢之。 山東志^{註③}韓克忠山東武城人。授翰林脩撰。學行淳實。七月 命克忠署司業事。其見寵擢如此。克忠興^{註④}敝補壞、脩明學政。論者謂、祭酒宋訥之後、克忠足以繼之。尋遷河南僉事卒。

世稱春榜夏榜、以此。又謂南北榜。進士陳郊等伏法削籍。故今但有克忠榜、而陳郊榜無可考矣。若會試錄、則猶存也。^{註⑤}



洪武三十年（一三九七）二月、天下の挙人に会試を行った。学士の劉三吾（名は如孫、三吾は字、茶陵の人）等が考試官となり、秦和の宋琮等五十二人を取ったが、「その中に」中原や西北の士人は一人もいなかった。三月、殿試で閩県の陳郊を第一位に選ぶと、北方の挙人はこぞって不平を述べた。皇帝が閱見すると、取ったのはみな南方の士人であった

ので、これ(選考のあり方)を疑った。儒臣に命じて再試験を行わせ、下第者の答案の中から優秀な者を選んで、それを合格させた。ここに至って、侍読の張信(既出)等、御命を受けた者達が、各々十巻を審査し、果してどうしようもない「水準の」文章を取り出して御覧に入れると、皇帝は益々怒った。ここに至って、「改めて」六十一人を取った。宮殿で策問の再試験を行い、山東の韓克忠(字は守信、城武の人)を首席に選んだ。この時、六月一日であった。「合格者は」全て山東、山西、河南、北平、陝西、四川の士人であった。

『登科考』陳郊は閩人である。術数の学にくわしかった。試験に赴く日に、親しい人に言った、「今年の状元が、刑罰に問われるのはどうしてであろうか。」と。しばらくして、自分がそういうめに遭ったのである。

『山東志』韓克忠は山東武城の人である。翰林院修撰を授かった。学業、德行は、純正篤美であった。七月、克忠に命じて国子司業の職務に就かせた。彼が寵愛されたようすは、このようであった。克忠は「国子監で」衰退したものを再興し欠陥を補い、学政を整え明らかにした。論者は、「祭酒宋訥(字は仲敏、号は西隱、滑県の人)の後は、克忠こそがそれを嗣ぐに足る」と言った。ついで河南僉事に移って卒した。

世間で、春榜、夏榜と称しているのはこういった事情による。また、南北榜とも言う。進士陳郊等は法に服して、籍を削られた。それ故に、今ではただ克忠榜「の記録」が有るだけで、陳郊榜は調べようが無い。「但し」「会試録」については、なお存している。

【注】①登科考……「状元」を「狀頭」に作る。また、「身羅之」が「果然」になっている。②山東志……明・陸欽撰『嘉靖』山東通志(『四庫全書存

目叢書』史部第一八七・第一八八冊)卷三十「人物三」は、「七月、克忠」の部分「擢国子司業」に作るのをはじめ、若干の異同がある。③司業……国子監の副長官。④祭酒……国子監の長。⑤若會試録則猶存也……未詳。

【補説】画題は、再審査後の試巻を御覧に入れようとする場面か。

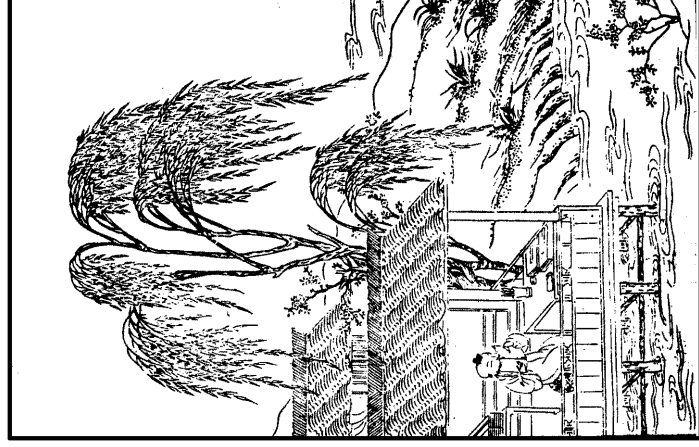
状元胡廣

洪武二十三年庚辰、實革除二年也。廷對之士吳溥等一百二十人、擢胡廣等一百二十人、擢胡廣第一。

按胡廣、字光大、號吳菴、江西吉水、生八歲而孤^{註①}。好學、日記數千言。德器不凡。及登第、建文謂、其名與漢臣同^{註②}。且胡廣豈可容廣。更名靖。時年三十六。狀元錄^{註③}吉水縣東有鑑湖、諺云、鑑湖水決出狀元。是歲水決、胡廣應之。西樵野記^{註④}胡廣吳溥、廷試俱取首甲。而狀元未定。上雖注意於溥、然試問小内豎曰、今年狀元在何處。即對曰、在湖廣。聞之胡廣其名也。遂擧第一。革除錄^{註⑤}廷對定王良亦第一。建文以良貌不及廣、且廣策有親藩陸梁、人心搖動之語稱旨、遂以廣易之。

登科考^{註⑥}上名靖、至永樂中得幸、復疏名廣耳。

【校勘】「登科考」は、小字で書すべきであろう。



洪武三十三年（一三四〇）、「というのは」実は取り除かれた「元号、建文の」二年である。殿試に臨んだ士人は呉溥（字は徳潤、崇仁県の人）等百十人であり、胡広等百十人を合格させ、胡広を第一位に選んだ。

考えるに、胡広は、字は光大、号は呉菴、江西吉水「の人である」。生れて八歳で父を亡くした。学問を好み、一日に数千言を暗記した。立派な人格には非凡なものがあつた。登第した時に、建文帝は、「この者の名は漢の臣と同じである。しかも、「その名の意味する如く」北方の異民族が広がるのを許すわけにいこうか。」と言ひ、名を靖に改めさせた。この時三十六歳であつた。

『状元録』吉水県の東に鑑湖がある。諺に言っている、「鑑湖の水が決壊すると、状元が出る」と。この年、「鑑湖の」水が決壊しており、胡広はそれに応じたのである。

『西樵野記』胡広と呉溥は、殿試でともに首席となつた。しかしながら、状元はまだ決まらなかつた。皇帝は、気持ち溥に傾いていたものの、宮殿の御蔵の小僧に試しに「今年の状元はどこにおるか。」と尋ね

てみると、すぐに「胡広です。」と答えた。これ（状元）を閲見してみると、胡広とはその名であつた。かくて、第一位に挙げた。

『革除録』殿試「の序列」が決定したところ、王良（字は欽止、江西吉水の人）がやはり第一位であつた。建文帝は、良の容貌が広に及ばず、また広の対策には「親藩が欲しいままに振る舞ひ、人心が動揺している」という言葉があつて、自分の考えにかなつていないことから、そこで広を良に替えて「状元」にした。

『登科考』皇帝は、靖と名づけたが、永楽年間に「帝の」寵愛を得るようになって、再び上疏して広を名としたのである。

【注】①生八歳而孤……『建文二年殿試登科録』（明代登科録彙編）に、「慈侍下」と有る。なお、拙論「明代の「登科録」について」（『福岡教育大学紀要』第五十四号 二〇〇五）一二頁参照。②其名與漢臣同……字は伯始、南郡華容の人。『後漢書』卷七十四に本伝がある。③状元録……明・陳澧撰『皇明歷科状元録』（『北京図書館古籍珍本叢刊』第二十一）には、「吉水縣治東二里有鑑湖、諺云、青湖水決、鑑湖決、文江出状元。是歲胡廣中甲科。……」とある。④西樵野記……明・侯甸撰（『続修四庫全書』第二二六六冊）卷八「胡広状元」は、「呉溥」を「楊公溥」に作る。⑤革除録……明・宋端儀撰。『明史』卷百六十一の本伝に、「宋端儀、字孔時、莆田人、成化十七年進士。……端儀慨建文朝忠臣湮没、乃搜輯遺事、爲革除録。建文忠臣之有録、自端儀始也。」という。未見。⑥親藩陸梁人心搖動……『建文二年殿試登科録』に、「……自陛下嗣位以來、寬租負之徵、下養老之詔、省刑罰之繁、四海之民、莫不欣戴。近以陸梁遠近搖動、而天下之民心不攝者、此陛下躬行仁義之效、固結於人心者、又非一日也。此臣所謂陛下已行之驗者。……」とある。⑦登科考……字句に若干の異同が見られるが、文意に関わらない。

【補説】王世貞撰『弇山堂別集』卷二十一「史乘考誤」に、「按『革除錄』言、是歲壬辰第一、以貌寢故改用廣。」と述べたあと、『西樵野記』と同趣旨の『皇明紀略』の文章を引き、「且使『紀略』所載爲眞、則文定何以不爲第二、而在二甲耶。」という。『建文三年殿試登科録』を見ると、王辰が第一甲第二名で、呉溥は第二甲第一名である。画題は、年少の頃の胡広が記誦に励む様子。

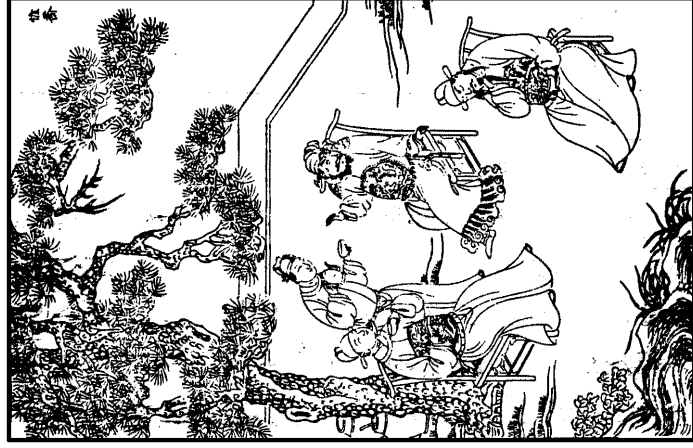
状元曾棨

永樂二年甲申 廷對之士楊相等四百七十二人^{註①}。遵洪武乙丑例、擢曾棨第一。

按曾棨、字子棨、江西吉水人。自幼穎敏端重言笑不苟。五歲識象戲字。治書經舉進士。對策幾二萬言、不起草。上奇其才、召問典故、輒應口對。命撰天馬海青歌、揮筆立就、詞氣豪宕。賜冠帶朝服、馬璫帶、深沐眷寵。群士有以文士薦者每曰、得如吾曾棨否耶。^{登科考}成祖欲求博聞多識之士、命學士解縉、採天文律曆爲題。意士子必爲所窘。及得棨卷、學問淵邃敷奏詳明。上批貫通經史、識達天人、有講習之學、有忠愛之誠。擢冠天下、昭我文明。尚資啓沃、惟良顯哉。^{*1}山野記有虜使至、稱善飲。有司推能伴飲者、得一武弁、猶恐不勝。上令廷臣自薦、曾請往。

上問鄉量幾何。對曰、無論量。但當陪過此虜。逮往、二人黔飲終日、虜使已酣、武人亦潦倒、內翰爽然復命。上笑曰、無論文學。此酒量豈非大明狀元耶。錫以內醜甚厚。

【校勘】1、缺「枝」字。 2、「鄉」は「卿」の誤り。



永樂二年（一四〇四）、殿試に臨んだ士人は楊相（字は之宜、泰和の人）等四百七十二人であった。洪武十八年（一三八五）の例に従い、曾棨を第一位に選んだ。

考えるに、曾棨は、字は子棨、江西吉水の人である。幼い時から才知が勝れて賢明で端正で敵かな性格であり、みだりに談笑することはなかった。五歳で「文字の」象形を認識し文字で遊び興じた。『書経』を修得して進士に挙げられた。對策「の分量」は二万言近くもあつたが、草稿を作らなかつた。皇帝は、その才能を評価し、召し出して典故を問うたところ、「問いを発すれば」即座に答えた。「天馬海青歌」を賦するよう命じたところ、筆を揮って立ちどころに作り上げ、「その」文章の風気は豪放であつた。冠帯、朝服、馬璫の帯を賜わり、深く寵愛に浴した。群臣の中に文学の士を推薦する者がいると、いつも、「吾が曾棨のような人物が得られたのか。」と尋ねた。

『登科考』成祖は、博聞多識の士を求めようとして、學士解縉（字は大紳、吉水の人、洪武二十一年進士）に命じて天文律曆を策題に取り上

げさせた。受験生は必ずや苦しむに違いないと考えた。「ところが」柴の答案を得たところ、学問は奥深く、意見の叙述は詳細明瞭であった。皇帝は、「経史に通曉し、天と人を知り尽くし、講習の学問を身につけており、忠愛の誠を持している。拔擢して天下に冠たらしめ、我が文明を明らかにしよう。「そうすれば、朝廷が」人材を尊び「臣下が」率直に上奏する風が、誠にあきらかとなるであろう。」と批評した。

『枝山野記』異民族の使者がやってきたところ、「その使者は」酒豪であると豪語した。役人は、一緒に渡り合える者を推薦しようとして、一人の武人を探し出したが、「この男でも」まだ勝てないのではないかと危惧した。皇帝は、廷臣らに自薦させたところ、曾が往かせてくれるよう願い出た。皇帝は、「おぬしの酒量はいか程か。」と尋ねた。答えて言うに、「量など問題ではございません。ただこの夷狄と一緒に飲んで負かすだけです。」と。「酒席に」行き、三人で黙って一日中飲んでいると、異民族の使者は既に酩酊状態であり、武人もまた泥酔状態となっていたが、内翰（曾）は颯爽として復命を行った。皇帝は笑って「文章は言うまでもない。この酒量は何と大明の状元に相応しいことか。」と言い、たっぷり御酒を賜った。

【注】①四百七十二人……『皇明登科考』ほか、四百七十人とするものが少なくない。②登科考……『探天文律曆』の後に、「禮樂制度擬撰」の語がある。また、「學問淵邃敷奏詳明」の部分は、「記誦盡歡異以爲第一」となっており、文章が異なる。③枝山野記……明・祝允明撰『枝山野記』（明・李枋輯『歷代小史』所収）では、「得一武弁」の前に「纒」の字があり、「但當」を「且當」に作り、「上笑曰」を「上嘆曰」とするなど、文字に若干の異同が見られる。

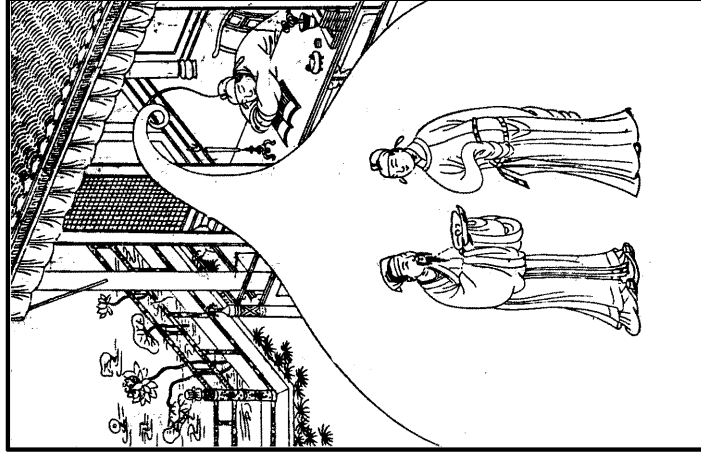
【補説】図には「黃惟（維）喬」の署名がある。画題は、虜使、武人と飲み

比べをする様子。

狀元林環

永樂四年丙戌、廷對之士朱縉等二百一十九人、擢林環第一。

按林環、字高璧、福建莆田人。八閩志^{法5}幼時矢口成誦、甫成章肆筆成章。登第授脩撰、脩永樂大典^{法2}。兩爲會試考官。從幸北京、進講經筵^{法3}、音語洪亮、大被眷寵。卒年四十。夢徵錄^{法6}環將試春闈、夢友李文淵送犬肉一片、環彎一臂受之。蓋片犬乃狀字、彎一臂類元字。後官文淵閣大學士、始悟李文淵乃先兆也。



永樂四年（一四〇六）、殿試に臨んだ士人は朱縉（永豊の人）等二百一十九人であり、林環を第一位に選んだ。

考えるに、林環は、字は高璧、福建莆田の人である。

『八閩志』幼い時から、正確な言葉づかいで誦讀を行い、童子となるとすぐに筆を自在にふるって文章を書いた。登第すると脩撰を授かり、

『永樂大典』を編纂した。会試の考官を二度務めた。「永樂帝が」北京に御幸するのに付き従い、経筵で進講を行った際には、声が大きく朗々としており、大いに寵愛を受けることとなった。卒年は、四十歳であった。

『夢徵録』環が会試に臨もつとした時、友人の李文淵が犬肉一片を送ってきたのを、環が片腕を曲げて受け取る夢を見た。要するに、「片」「犬」とは「狀」の字であり、片腕を曲げるというのは「元」の字を類推させる。後に文淵閣大学士となり、始めて李文淵とは、予兆であったことがわかった。

【注】①八閩志……明・黃仲昭撰『八閩通志』（『北京図書館古籍珍本叢刊』所収）巻七十一参照。おおむね同内容であるが、若干文字に異同が見られる。

②脩永樂大典……『永樂大典』は、永樂元年七月解縉等奉勅撰。二年十一月に纂修成つた際に賜った書名は『文獻大成』。後、修訂をへて、五年十一月に『永樂大典』の名を賜った。『八閩通志』には、「預修永樂大典、爲書經總裁官。」とある。③經筵……皇帝が經書を学ぶ席のこと。④夢徵録……『千頃堂書目』巻十三「五行類」に「章軒夢徵録」がある。未見。

【補説】画題は、李文淵が送ってきた犬肉一片を、環が片腕を曲げて受け取るのを夢に見る様子。

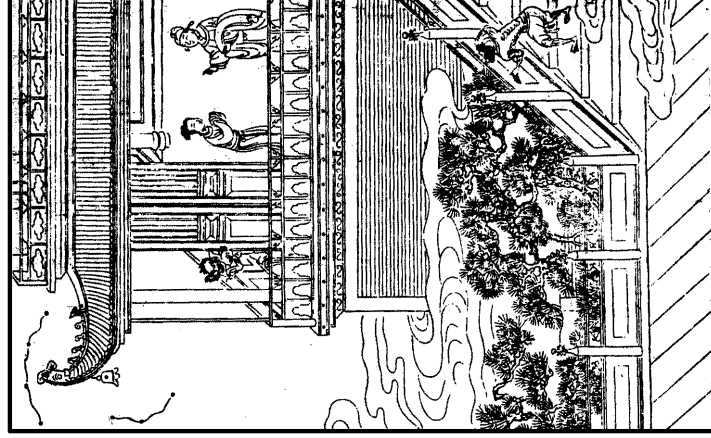
狀元蕭時中

永樂九年辛卯 廷對之士、擢蕭時中第一。

七年己丑會試、陳璉等八十四人。上巡狩北京、詔禮部、以璉等寄監讀書。是年、駕還京、乃舉 廷試。

按時中、字可後、江西廬陵人。少負大志。每言不怕鬼。時郡學尊經閣多

怪。諸友試之、先以衣置閣中、暮令往取曰、能此、方見心正。時中至閣中、聞婦人聲、問曰、此何邪也。婦曰、我學前某人妻。一鬼迷至。鬼見君來遂曰、蕭狀元來、悉逃。時中出呼其夫、携其妻歸。



永樂九年（一四二一）、殿試に臨んだ士人「の中から」、蕭時中を第一位に選んだ。

七年の会試では、陳璉（字は廷嘉、臨海の人）等八十四人「を取った」。皇帝は、北京を視察するため、礼部に詔して「殿試を延期し」、璉等を国子監に送って学習させた。この年、皇帝が都に戻り、そこで廷試を挙行したのである。

考えるに、時中は、字は可後、江西廬陵の人である。幼い頃から大志を抱いており、常に鬼など怖くないと口にしていた。ある時、郡学の尊経閣で不思議な事が多発した。友人達は彼を試そうと思い、事前に衣を閣中に置いておき、暮になって「時中に、それを」取りに行かせようとして、「これが出来てこそ、嘘をついていないことが証明されるぞ。」と

言った。時中が、閣中に入って行くと、婦人の声が聞こえたので、尋ねて言った、「お前はどのような悪者だ。」と。婦人は言った、「私は郡学の前「に住む」某人の妻です。「この辺りに」二鬼がさまよってやって来ておりました。「しかし」鬼は、貴方が来るのを見ると、『蕭状元が来た』と言ったきり、みな逃げてしまいました。」と。時中は、出て行って彼女の夫を呼びだすと、その妻を連れて帰らせた。

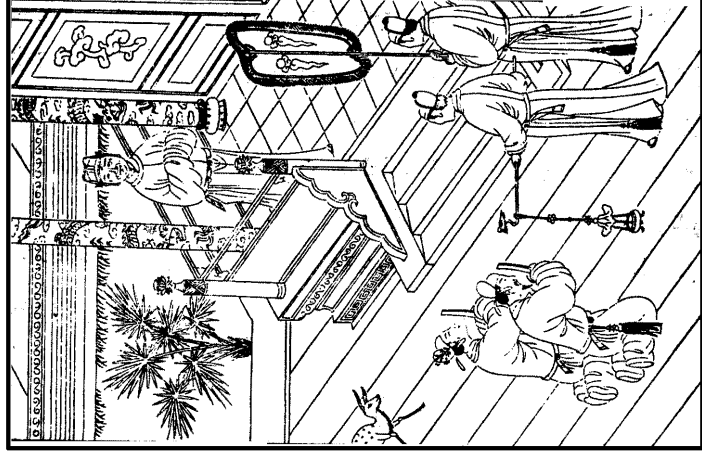
【補説】画題は、郡学の尊経閣で某人の妻の鬼と話す蕭時中と、それをうかがい見る二鬼。

状元馬鐸

永樂十年壬辰 廷對之士林誌等二百六十人、擢馬鐸第一。

按馬鐸、字彦聲、號梅岩、福建長樂人。義命編鐸初與邑人林誌同學。

誌高才博學、鐸亦自知其不及。誌鄉試會試俱第一。比殿試出、徧扣諸名士之作、皆不己若、深以魁選自負。迨傳臚之夕、夢有馬奪其首。誌始懷疑。既而傳臚、馬果第一、誌第二。甚怏怏不服。每欺鐸汝沒學問狀元、何以居我上。一日互爭於廷。上知之曰、試汝等一對。對佳者、即爲眞状元矣。其對題曰、風吹不響鈴兒草。鐸應聲曰、雨打無聲鼓子花。上大稱許。誌想慮、時竟不能對、遂愧服。蓋鐸幼時夢中有語之曰、雨打無聲鼓子花。不知謂何。至是用之、蓋天設也。不然、何以屈林誌耶。狀元鐸縣西太平港、舊名馬江、江之東有十洋街。古諺云、十洋成市狀元來。鐸應其兆。



永樂十年（一四二二）、殿試に臨んだ士人は林誌（字は尚黙、号は蓴齋、閩県の人）等百六十人であり、馬鐸を第一位に選んだ。

考えるに、馬鐸は、字は彦声、号は梅岩、福建長樂の人である。

『義命編』鐸は、もともと同郷の林誌と同学であった。誌は、才能高く博學であり、鐸も「誌には」及ばないことを自覚していた。誌は、郷試、会試ともに第一位であった。殿試が奉行される時期になると、諸々の名士の作品に片一端から当たってみたが、全て自分に及びはしなかった。首席及第を強く確信していた。順位の発表の「前日の」夕方になると、馬から首を奪われる夢を見た。誌は、このとき始めて懷疑の念を抱いた。「そういうことがあった」後、順位の発表では、果たして馬「鐸」が第一位であり、誌は第二位であった。「誌は」非常に不愉快で承伏出来なかった。ことあるごとに、「鐸よ、お前は無学の状元のくせに、どうして私の上に居るんだ」と侮辱した。ある日、朝廷で互いに言い争いになった。皇帝はそれを知り言った、「お前達に對句を一つ試験しよう。對句がうまく出来た者こそ、眞の状元に違いない。」と。その對句

の題は、「風が吹いても響かない鈴児草(ツリガネソウ)」であった。鐸は、声に応ずるように言った、「雨に打たれても音がしない鼓子花(ヒルガオ)」と。皇帝は、大いに賞賛した。誌は、「馬を」超えようと思ったが、この時最後まで答えることが出来ず、かくて恥じ服した。思うに、鐸は幼い時に、夢の中で「誰かが」「雨に打たれても音がしない鼓子花」と語る「のを聞いたことがあった」が、何のことかわからなかった。この時になってそれを用いることになったのは、つまりは天のはからいであつた。そうでなければ、どうして林誌を屈服させることが出来たであらう。

『状元録』県の西の太平港は、旧名は馬江であり、江の東に十洋街がある。古い諺に言っている、「十洋に市が出来れば状元が出るであらう」と。鐸はその兆に応じたのである。

【注】① 一百六十人……『皇明貢舉考』ほか一百六人とするものが少なくない。
② 義命編……未詳。 ③ 傳臚……科挙合格者が天子に謁見を賜る時、氏名を呼びあげる儀式。臚伝とも言う。 ④ 状元録……異同無し。

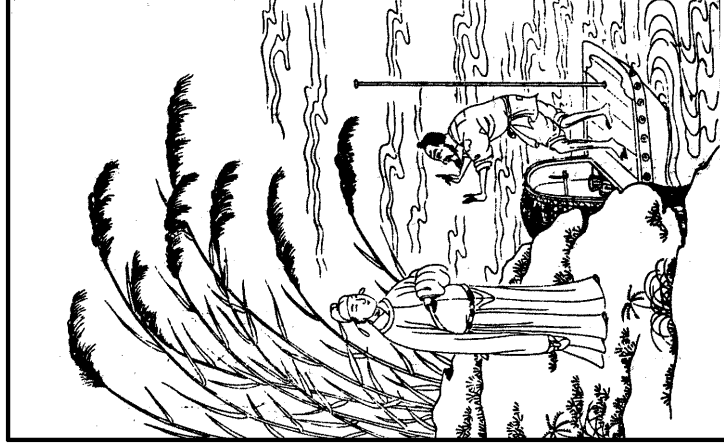
【補説】画題は、永楽帝から争いを調停される二人の様子。

状元陳循

永楽十三年乙未、始詔天下舉人會試于北京^{註①}、取洪英等三百五十人。廷試擢陳循第一。

按陳循、字德邁、江西泰和人。甲午首鄉薦、會試擬旨、考官梁潛以鄉曲避嫌、置第二。廷試首擢。昔水湧龍洲^{註②}識曰、龍洲過縣前、泰和出状元、適龍洲水溢、循應兆。状元^{註③}循家作醮度孤^{註④}、有漁翁夜半聞云、明夜陳

状元家放水燈^{註⑤}。我輩去看。漁翁開蓬、寂無人。次早、果有陳秀才來叫漁船、放水燈。漁翁言其事。



永楽十三年(一四二五)、天下の挙人に詔して初めて北京で会試を挙行し、洪英(字は実夫、懐安の人)等三百五十人を取った。廷試では、陳循を第一位に選んだ。

考えるに、陳循は、字は德邁、江西泰和の人である。「永楽」十二年の解元となり、会試でも会元の候補となったものの、考官梁潛(字は用之、泰和の人、洪武二十九年挙人)が、同郷であることを理由に、嫌疑を避けるために第二位に置いた。廷試では、状元に選ばれた。昔、「水湧龍洲識」に言っている、「龍洲「の水」が「溢れて」、県城の前を過ぎれば、泰和に状元が出る」と。ちょうど龍洲の水が溢れ、循は予兆に応じたわけである。

『状元録』循の家で水鬼を祭る儀式を行おうとしていた時、漁夫が夜半に「次のようなことを」耳にしたという、「明日の夜、陳状元の家で

は灯籠流しをする。我々も行って見よう。」と。漁夫は蓬をかき分けて「のぞいて」みたが、ひっそりとして人影が無かった。翌朝、果たして陳秀才がやって来て、漁船を呼んで、灯籠流しを行った。漁翁は、「陳循に」事の次第を語った。

【注】①始詔天下舉人會試于北京……このことについては、新宮宇氏「永樂十三年乙未科について——行在北京で最初に行われた会試と殿試——」（『明代史研究会創立三十五年記念論集』汲古書院 二〇〇三、のち『北京遷都の研究』汲古書院 二〇〇四）を参照。②水湧龍洲讖……明・林庭樞撰『嘉靖』江西通志』（『四庫全書存目叢書』史部第一八二・第一八三冊）卷二十四「吉安府・山川」龍洲」に「在秦和縣治南。古諺云、龍洲過縣前秦和出狀元。永樂間、乙未陳循、辛丑曾鶴齡、應之。」とある。③狀元錄……「循家作醮度孤」の部分か、「循里中、每歲九月、作九皇醮。循家爲倡家北毛家灘。」になっている。また、「次早果有」以下が、「人來曰、我陳秀才家來、討漁船二隻、今夜要放水燈。漁翁送舟去、因言其事。」になっている。④作醮度孤……「醮」は道教の祭祀儀礼のこと。「度孤」については未詳。待考。⑤放水燈……水鬼を祭る儀式。水面に蓮の花をかたどった水灯を流し、舟の上から道士に祭祀を行ってもらう。⑥秀才……府、州、県学の学生である生員の雅名。

【補説】画題は、漁翁の話の聞く陳循の様子。

狀元李騏

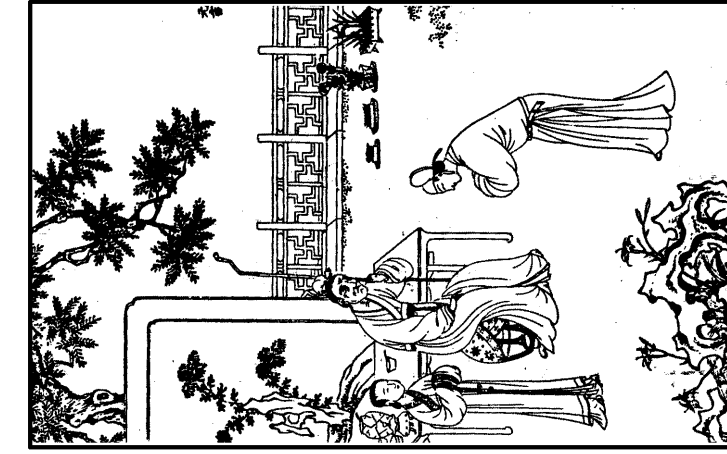
永樂十六年戊戌 廷對之士董璘等二百五十人、擢李騏第一。
按李騏、字德良、福建長樂人。初名馬、鄉舉第一。 廷試、御筆改馬爲騏。越三日臚傳。凡三唱無應之者。 上曰、即李馬也。騏乃受 詔、

賜紗帽銀帶朝服。中外傳以爲榮。爲人嚴毅、有氣節。方病、值 上升遐、即出臨哭、病遂深卒。年四十八。終於脩文。 狀元^註是歲長樂大平港、又應十洋成市狀元來之讖。



永樂十六年（一四一八）、殿試に臨んだ士人は董璘（字は徳文、高郵の人）等二百五十人であり、李騏を第一位に選んだ。

考えるに、李騏は、字は徳良、福建長樂の人である。最初の名は馬であり、郷試では解元であった。殿試では、皇帝が御筆で「馬」を「騏」に改めた。三日たってから臚伝があった。全部で二度名を呼んだが、それに応じる者は誰もいなかった。皇帝は言った、「李馬のことであるぞ」と。騏は、ようやく詔を受けとり、紗帽、銀帶、朝服を賜わった。「この話は」朝廷の内外に伝わって、栄誉と讃えられた。「李騏は」人柄が厳かで毅然としており、気骨があった。ちょうど病んでいる時に、皇帝が崩御するのに遭うと、ただちに出仕して哭泣し、かくて危篤に陥り死んでしまった。年は四十八歳であった。「官は」修文で終わった。



是科、浙江嘉興包鼎包鼐兄弟同登^{註③}。

擢第一、授脩撰。年三十九。是歲龍洲水溢、又應狀元之讖。

兄舉進士、爲翰林庶吉士、以沒。養母五年、學者爭師之。母命赴試、得

既冠、以書經擅名、由儒士、與兄椿齡^{註②}同中鄉薦。明年會試、鶴齡留養於家。

永樂十九年辛丑 廷對之士陳中等二百人、擢曾鶴齡第一。

狀元曾鶴齡

『状元録』この年、長樂の大平港は、また「十洋に市が出来れば状元が出る」という予言に応じたことになる。

【注】① 状元録……文章に異同無し。

【補説】画題は、李騏が、紗帽、銀帯、朝服を賜わる様子。

永樂十九年（一四二二）、殿試に臨んだ士人は陳中（字は舜用、莆田の人）等二百人であり、曾鶴齡を第一位に選んだ。

考えるに、曾鶴齡は、字は延年、号は松坡、江西泰和の人である。母は、星が寢室に落ちる夢を見て、そうして鶴齡を生んだ。成人してからというもの、『書経』の「学識」によって名声をほしいままにし、儒士の身分で兄の春齡（永樂四年進士）とともに郷試に合格した。明年の会試の際は、鶴齡は家にとどまって「母を」養った。兄は、進士に挙げられ、翰林庶吉士となったが、「直後に」没した。「かくてその後も鶴齡は」五年「の間」母を養った。「その間」学ぶ者達は争って彼を師とした。母は、「鶴齡に」試験に赴くよう命じ、「その結果」進士に挙げられた。第一位に選ばれ、修撰を授かった。年は、三十九歳であった。この年、龍洲の水が溢れ、また状元「が出る」の予言に応ずることとなった。この科では、浙江嘉興の包鼎（字は汝調）、包鼐（伝未詳）の兄弟が一緒に及第した。

【注】① 二百人……『皇明貢举考』ほか、「二百一人」とするものが少なくない。

② 由儒士與兄椿齡同中郷薦……明代、科挙に応ずるには原則として生員（府学、州学、県学等の学生）である必要があったが、格別成績が優秀な人物は、学籍が無くとも「儒士」として科挙試験に応ずることを許された。明人の伝記資料には、儒士を以て科挙に応ずという記述が間々見られる。『日知録』卷十七「額数」に「明初有以儒士而入科場者、謂之儒士科舉。景泰間、陳循奏、臣原籍吉安府、自生員之外、儒士報科舉者、往往一縣至有三三百人。……」③ 浙江嘉興包鼎包鼐兄弟同登……『皇明貢举考』ほか、進士名録に兄弟の姓名が見られない。成化十四年科の誤り。

【補説】図には、「黃元吉」の署名がある。画題は、母に恭しく仕える曾鶴

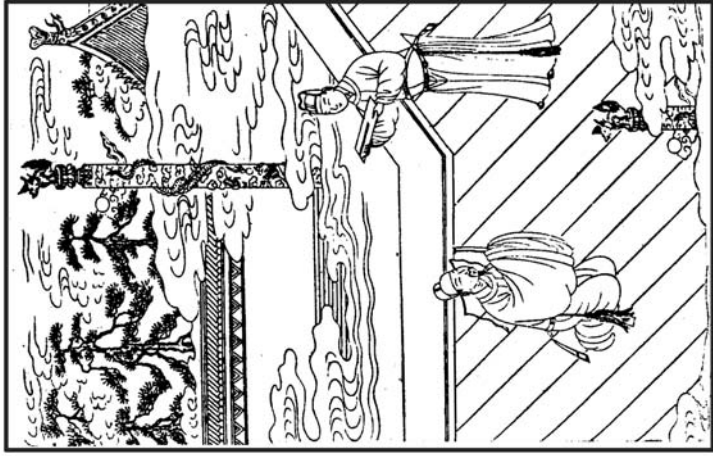
齡の様子。

狀元邢寬

永樂二十一年甲辰 廷對之士葉恩等一百四十八人、擢邢寬第一。

按邢寬、字用大、直隸無爲人。幼穎敏力學。 廷試初擬孫曰恭第一。

上謂、曰恭乃一暴字也。及見邢寬二字、甚喜擢第一。以丹書其名、前此未有。當時咸以爲寵遇。寬家富且殷。宦游十數年、及歸、而母尚無恙。寬先世有仕者。每爲囚求生道曰、與其殺不辜、寧失不經。人多感之。因得此報。



永樂二十一年（一四三三）、殿試に臨んだ士人は葉恩（字は允成、臨海の人）等百四十八人であり、邢寬を第一位に選んだ。

考えるに、邢寬は、字は用大、直隸無爲の人である。幼い時から聡明で、学業に励んだ。廷試では、当初、孫曰恭（字は恭貧、豊城の人）を第一位の候補にしていた。皇帝は、「『曰恭』とは、なんと『暴』とい

う字であるぞ。」と言った。「邢寬」という二字を見たところ、非常に喜んで第一位に選んだ。朱でもって名前を書くということは、これ以前にはなかったことであつた。当時「の人々」はみな格別な寵愛であると思ひなした。寬の家は富んで栄えた。官界を十数年遊歴し、帰郷した時には、母はまだ健在であつた。寬の先祖には役人がいた。常に囚人のために活路を追求してやり言った、「無実の者を殺すくらいなら、むしろ大罪をなくせ。」（『書経』大禹謨）と。多くの人々がこれに感じ入った。そのお陰でこの報いを得たのである。

【補説】画題は、「丹書」を「丹書鉄契」（功臣に与えた免罪の手形）の意に解し、邢寬が丹書を賜わる様子を描いたものか。

狀元馬愉

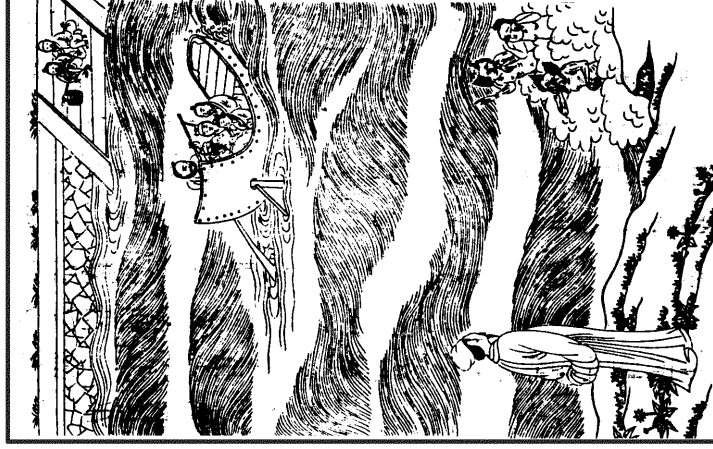
宣德二年丁未 廷對之士趙鼎等一百人、擢馬愉第一。

按馬愉、字性和、號璞菴、山東臨朐人。七歲方言、下筆成誦。後 廷試第一、授脩撰、二年父病歸。 賜驛騎并藥餌費。卒年五十三。 客座新聞臨朐渡口有士人、夜乘涼、聞渡口鬼擲愉曰、明日午後、我輩得替矣。可托生也。其人明午伺驗之。至期、見一舟載五六人、解纜鼓柁。忽一婦求渡。舟子挽舟載之渡。竟無他。至夜、仍於渡口納涼。鬼復擲愉且哭曰、却被馬丞相救了一船人、我輩苦也。士人迹其婦、乃馬融長子之妻。正懷娠。後生一子曰、愉官至入閣。其爲世端、鬼神烏得害之哉。

皇朝通紀註自洪武甲子一新科目、迄今凡一十五科。以 廷對魁天下士者、恆出於東南、而北方學者鮮與焉。獨以東齊之秀、魁天下士、北方學者與有光。 仁宗與侍臣論科舉之弊。 仁宗曰、北人學問、遠不逮南人。楊

士奇對曰、自古國家兼用南北士。長才大器、多出北方。南人有文多浮。試卷例緘其名。請今後、於緘外、書南北二字。如一科取百人、南取六十、北取四十、則南北人才皆入用矣。上命計議以聞。至宣宗嗣位、始奏行之。後復分南北中卷、以百名爲率。南北各退五名爲中卷。北卷、則北直隸、山東、河南、山西、陝西。中卷、則四川、廣西、雲南、貴州及鳳陽、廬州二府、徐、滌、和三州。餘皆南卷。

【校勘】「端」「瑞」の誤りか。



宣徳二年（一四二七）、殿試に臨んだ士人は趙鼎（黄巖の人）等百人であり、馬愉を第一位に選んだ。

考えるに、馬愉は、字は性和、号は璞菴、山東臨朐の人である。七歳でやっと言葉をしゃべり、筆で書くとそのまま暗誦できた。後に、廷試で第一位になり、修撰を授けられた。二年「を経た時」、父が病氣にかかり帰郷した。「その際には」馭馬、及び薬餌の費用を賜った。享年は五十三歳であった。

『客座新聞』臨朐の渡し場に土地の者がいて、夜間涼をとっていると、渡し場で鬼の騒ぐ声が聞こえ、「明日の午後、わしらは交代出来ようぞ。生まれ変わるのだ。」と言う。その土地の者は、翌日の正午に待ち受けてこれを確かめようとした。時間になると、「船頭が」一艘の舟に五六人を乗せて、とも綱を解き羅を動かそうとするのが見えた。突然一人の婦人が「やって来て、一緒に」渡してくれるよう頼んだ。船頭は、舟を「渡し場に」引き寄せて彼女を乗せて渡った。結局何も起きなかった。夜になって、「土地の者が」同じように渡し場で涼を取っていると、鬼がまた騒いで、声を出して泣いて言った、「何と馬丞相のためにあの船の客達が救われてしまうとは。わしらは耐えられぬ。」と。土地の者はその婦人のあとをつけていったところ、それは馬融の長男の妻であった。おりしも妊娠中であった。後に一人の男の子を産んで言った、「愉は、官僚として入閣することになるであろう。この子は世の瑞祥であり、鬼神がどうして危害を加えることが出来ようか。」と。

『皇明通紀』洪武十七年に科目を一新してから、今までに全部で十五科である。宮殿で皇帝の策に答え、天下の士人の頂点に立つ者は、常に東南から出ており、北方の学生が「榮譽に」あずかることはほとんど無かった。「馬愉は」東斉の秀才としてただ一人天下の士人の頂点に立つことになり、北方の学生達はともに光明を見いだすこととなった。仁宗（洪熙帝）は、近臣と科擧の弊害について論じた。仁宗が、「北方の者の学問は、南方の者に遠く及ばない。」と言うと、楊士奇（名は寓、字が通行した、号は東里、泰和の人）が答えて言った、「古より国家は南北の士人を兼ね用いてきております。本当に大きな才能の人物は、北方から出ることが多うございます。南方の者は、文章が浮華に流れる者が多うございます。試験答案は名前を緘封する決まりとなっております。ど

うか今後は、封の外に南北の二字を書かせて下さいますよう。もし一科で百人を取るならば、南から六十人を取り、北から四十人を取れば、南北の人材がみな「朝廷に」入って用いられることとなります。」と。皇帝は、協議して上聞するように命じた。「その後」宣宗が位を嗣いでから始めて上奏して施行した。後に、また南北中巻に分け、百人を基準に計算し、南北から各々「百分の」五名をしりぞけて中巻「の合格者」に充てた。北巻とは、北直隸、山東、河南、山西、陝西である。中巻とは、四川、広西、雲南、貴州及び鳳陽、廬州の二府、滁、滁、和の三州である。残りは全て南巻である。

【注】①客座新聞……明・沈周撰『石田翁客座新聞』（『統修四庫全書』第一一六七冊）には同じ文章は見られない。但し、巻八に収める「舟人夢験」は、文章は簡略で、かつ江西泰和県の尹氏婦人の逸話になっているが、主題は一致する。②皇明通紀……「仁宗與侍臣論科舉之弊」以下のみ、『皇明通紀』巻六にはほぼそのまま見られる。③宣宗嗣位始奏行之……「南北巻」の問題については、檀上寛氏「明代科挙改革の政治的背景——南北巻の創設をめぐって——」（『東方学報（京都）』第五十八冊 一九八六）、「明代南北巻の思想的背景——地域性超克の論理——」（『東アジアにおける文化伝播と地方差の諸相』一九八八）を参照。共に同氏『明朝専制支配の史的構造』（汲古書院 一九九五）に収められている。

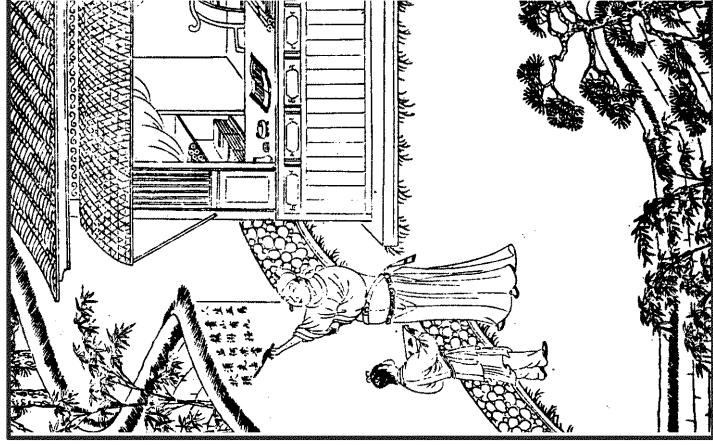
【補説】画題は、『客座新聞』の逸話を用いていると思われるが、手前に立つ人物は内容にそぐわない。

狀元林震

宣徳五年庚戌 廷試陳詔等一百人、擢林震第一。

按林震、字起龍^{註①}、福建長泰人。性質穎悟、幼有大志、讀書九龍山、見宋陳堯叟^{註②}詩云、人生五馬貴、山有九龍游之句。遂續云、極品何榮貴、須先占狀頭^{註③}。及長、每開卷輒曰、尼父章徧^{註④}三絶。豈可少間。學問該博、果狀元及第、以疾歸卒。

【校勘】「徧」は、「編」の誤り。



宣徳五年（一四三〇）、陳詔（字は廷詢、浙江青田県の人）等百人に殿試を行い、林震を第一位に選んだ。

考えるに、林震は、字は起龍、福建長泰の人である。性質は穎悟で、幼い時から大志を抱いていた。九龍山で読書をしている際に、宋の陳堯叟の詩に、「人生には太守の「地位という」榮達があり、山には九龍山の遊覧「という楽しみ」がある」という句があるのを見つけた。そこで「その句に」続けて、「官品を極めるのが何の榮貴であらう、きっと狀元

を獲得することが第一のことに違いない」と詠んだ。成長してからは、書物を開くたびに言った、「孔子は韋編三絶したということだ、どうしてわずかな時間も無駄にしてよかろうか。」と。学問は該博で、果して状元で及第したものの、病にかかって帰郷して卒した。

【注】①起龍……『宣徳五年進士登科録』(天一閣明代科挙選刊)によれば、字は敦声とある。②宋陳堯叟詩……堯叟、字は唐夫、閩中の人、端拱二年状元。③人生五馬貴山有九龍游……(訓読)「人生に五馬の貴あり、山に九龍の游有り」。詩の出典は未詳。④極品何榮貴……(訓読)「品を極むるは何の榮貴ぞ、須く先ず状頭を占めん」⑤尼父韋編三絶……『史記』孔子世家第十七参照。

【補説】画題は、九龍山で読書をしている際に興に乗じて壁に詩句を書き記す場面。

状元曹鼐

宣徳八年癸丑 廷試劉哲等九十九人、擢曹鼐第一。賜鼐等宴於禮部、遂爲例^{註①}。

按曹鼐、字萬鍾、號恆山、直隸寧晉人。幼有遐志、日誦數千言。事繼母、備極孝養。鄉試第二。以乙榜^{註②}授學正。上言年少寡學、未堪爲師、願改別職、自效命。授幕職、遂改泰和典史。愛民如子。劇邑政繁、處之裕如。公暇則延師儒、講明理性、篤學如經生。每爲尹所詰、曰、可作狀元。曰、不如是、不已也。壬子、督部工匠赴闕、乞入會試、中第二^{註③}。廷試問羲馬河洛象數^{註④}。鼐對稱旨、擢第一。以典史大魁天下、前代所未有也^{註⑤}。後以少宰入閣、死於土木^{註⑥}。官其子恩脩撰。蔭人翰林者、金忠之子達、胡廣之

子種^{*}、與曹恩纒三人。鼐父子晝被、可謂奇異。

【校勘】「種」は、「種」の誤り。



宣徳八年(一四三三)、劉哲(字は、希哲、万安県の人)等九十九人に殿試を行い、曹鼐を第一位に選んだ。鼐等には礼部で宴会を賜り、かくて「これが」恒例となった。

考えるに、曹鼐は、字は万鍾、号は恒山、直隸寧晋の人である。幼い時から遠大な志を抱き、一日に数千言を誦じた。継母につかえて孝養の限りを尽くした。郷試は第二位であった。「会試では」乙榜によって学正を授かったが、「年は若く学識は不十分であり、まだ教師となるのは無理でございます。別の職にお改め下されば、私は生命を捧げ「て職務に励みます」と言上し、幕職官を授って、かくて泰和の典史に改められた。我が子のように民を愛し、「泰和県は」政務の多忙な県で政務は繁雑であったが、余裕をもってそれを処理した。もし公務に暇ができると、儒学の師匠を招いて性理学を講究し、まるで学生のように学問に

打ち込んだ。県知事から「状元になるがよからう。」とからかわれるたびに、「そうでなければ、止められません。」と言った。〔宣徳〕七年、工匠を統率して宮城に赴いた際に、会試を受けさせて下さるよう乞い、第二位で合格した。廷試では伏羲の「河図」と禹の「洛書」に関わる象数の学が問われた。鞏の対策は、聖旨にかない、第一位に選ばれた。典史の身分で天下の状元となったのは、前代未聞のことであった。後に、少宰として内閣に入ったが、土木の変で死んだ。その子の恩（字号等未詳）には修撰の官が与えられた。「これまでに」恩蔭で翰林に入った者は、金忠（字は世忠、鄞県の人）の子の達（字号等未詳）、胡広の子の種（字は永齊）と、曹恩のわずか三人だけであった。鞏ら父子が恩恵をこうむったのは、珍しい事例であると言ってよい。

【注】①宴於禮部、遂爲例……『宣徳八年進士登科録』（天一閣明代科挙選刊）に「□□□□四日、賜宴□行在禮部」とある。また、『宣宗章皇帝実録』巻百「宣徳八年三月甲寅朔」参照。②乙榜……「副榜」とも言う。会試に下第した者のうち、成績優秀な者を儒学教官にしたり、国子監に入れて学習させた。

③中第二……『宣徳八年進士登科録』には、第二十七名または三十七名とある。④羲禹河洛象數……原文は、『宣徳八年進士登科録』参照。なお、『宣宗章皇帝実録』巻百「宣徳八年三月丙辰」によれば、「対策」は皇帝自らが閲したという。⑤以典史大魁天下前代所未有也……『明史彙』卷二百三の翁正春伝に「明一代科目、職官冠廷對者二人、曹鞏以典史、正春以教諭云。」という。⑥土木……正統十四年、オイラート族のエセンの侵入を英宗が討伐しようとして、土木堡で捕虜になった事件。

【補説】画題は、公務の暇に、儒学の師匠を招いて学問に打ち込んでいる様子か。

〔附記〕本稿は、平成十九年度科学研究費補助金（特定領域研究）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」（領域代表：東京大学・小島毅）の（A 01 - 02）「中国科挙制度からみた寧波士人社会の形成と展開」（研究代表者：早稲田大学・近藤一成）による研究成果の一部である。